

「ことばへの気づき」を促す大学英語授業

—映画を教材として—

教育内容開発コース
東京理科大学

シヨルティ沙織
梶木 貴之

University English Language Lessons for Developing Language Awareness:
Utilizing a Movie as Teaching Materials

Saori SCHULTE
Takayuki MASAKI

The present study examines the effect of an English movie as teaching materials for developing students' language awareness in a university English language classroom. This paper begins with the details of four experimental lessons designed for developing students' language awareness focusing on the differences between English language and Japanese language using a movie. It then provides the students' comments on worksheets and questionnaires, which illustrates how the movie gave the students clues to answer the questions of the activities, and also proves that utilizing a movie as teaching materials is one of the helpful ways to develop students' language awareness, in terms of word awareness and pragmatic awareness.

目 次

1. 研究の背景
2. 研究の目的と方法
3. 実践の内容
 - 3.1 対象
 - 3.2 年間シラバス上の位置づけ
 - 3.3 使用する映画
 - 3.4 指導目標
 - 3.5 授業展開
 - 3.6 教材の構成
 - 3.7 活動の詳細
4. 実践の結果
 - 4.1 解答用紙の記述
 - 4.1.1 手がかりにした映画の要素
 - 4.1.2 「ことばへの気づき」に関する記述
 - 4.2 アンケートの回答
 - 4.2.1 解答の際に参考にした映画の要素
 - 4.2.2 「ことばへの気づき」に関する回答
5. 考察
6. おわりに

1. 研究の背景

今日の大学英語教育で重視されているのは「コミュニケーション能力」の育成である。コミュニケーション能力は1970年代にハイムズ (D. Hymes) が提唱した能力モデルであり、チョムスキー (N. Chomsky) の生成文法的な言語の見方では、実際の言語使用を説明できないという問題意識に基づいたものであった。これは後にカナル (M. Canale) によって以下の四つの能力に分類され、1980年代、日本で広く紹介された。それは、①文法能力、②社会言語能力、③談話能力、④方略能力、の四つである。①は語彙・文法・発音などの総合的な言語知識、②は言語に関連した社会的規則を踏まえ、理解や表現をする能力、③は結束性 (cohesion) や一貫性 (consistency) を考慮し、言語を構成する能力、④は言い換えや聞き直しなど、コミュニケーションをより円滑に進める能力を表している (白畑他2009)。

このコミュニケーション能力を育成することの重要性は疑いようもないが、近年の英語教育において、同時に重視されているのは「メタ言語能力」である。例えば、岡田伸夫は「大学英語教育と初等・中等教育と

の連携」(2010)と題する論文の中で、「現在、『小・中・高・大の英語教育の主たる目的は何か』と問われたら、コミュニケーション能力の育成と答える人が大多数であろう。しかし、ことばを観察し、省察する力(メタ言語能力)を育成することも英語教育の重要な目的の1つである」(岡田2010: 20)と述べ、コミュニケーション能力と同時に、メタ言語能力を育成する必要性を強調している。

このメタ言語能力の定義は論者によって多少の違いがあるが、その代表は天津由紀雄の定義であり、それは「言語を意識化する能力」(天津2004: 67)となっている¹⁾。近年、天津はそれを「ことばへの気づき」と言い換え、「産出や理解などの言語運用の際に、通常、無意識的に使われる内部言語の性質(構造と機能)に対する気づき」(天津2009: 21-22)と定義した。この両者について、高等教育だけでなく中等教育も視野に入れたときに、今後、さらに議論が高まっていくことが予想されるのは「ことばへの気づき」である。というのも、新学習指導要領の方針を示した「中央教育審議会答申」(2016年12月)において、以下のような考えが示されたからである。

国語教育と外国語教育は、学習の対象となる言語は異なるが、ともに言語能力の向上を目指すものであるため、共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。(中略)学習指導要領等に示す指導内容を適切に連携させたり、各学校において指導内容や指導方法等を効果的に連携させたりすることによって、外国語教育を通じて国語の特徴に気付いたり、国語教育を通じて外国語の特徴に気付いたりするなど、言葉の働きや仕組みなどの言語としての共通性や固有の特徴への気づきを促すことを通じて相乗効果を生み出し、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。(中央教育審議会2016: 36)

この中では国語教育と外国語教育を通して、「言葉の働きや仕組み」に対する「気づき」を促すことが重視されている。この記述を踏まえて先行研究を振り返ってみると、中等教育では「ことばへの気づき」の促進(メタ言語能力の育成)を目指した先行実践として、すでに秋田他(2013)、那須(2016, 2017)、石井(2018a, 2018b)などが存在する。秋田他(2013)は「私は、黒い目のきれいな女の子に会った」という文を英訳することを通し、日本語の曖昧性について考える授業を行い、その効果を検証した。那須(2016)

と那須(2017)はそれぞれ『百人一首』と『古事記』を教材とし、英訳と比較することで、原文の解釈の多様性について考える授業を実施し、生徒の反応を分析した。石井(2018a)と石井(2018b)はそれぞれ『雪国』の英訳と英語俳句を題材に、日本語と英語の特徴について意識化する授業を展開し、考察を行っている。一方、高等教育における先行研究としては、絵本*The Giving Tree*を教材として二つの日本語訳と比較し、物語の解釈を行った柗木・久世(2014)がある。しかし、それ以外にはほとんど先行研究が確認できないというのが現状である。

2. 研究の目的と方法

このような状況を踏まえ、本論文は「ことばへの気づき」を促す大学英語授業について検討することを目的とする。その際に教材として使用するのは映画である。英語圏で作成され日本で公開された映画のDVDには、多くの場合、英語字幕、日本語音声、日本語字幕が付属している。これを利用して、英語音声・英語字幕と日本語音声・日本語字幕を比較してみると、直訳との開きが大きい日本語字幕、日本語音声になっていることがある。もちろん、字幕や吹替を作成する上では文字制限が存在し、さらに吹替の場合はオリジナル言語の口の動きと大きな違いが生じないように配慮する必要があるため、それらが要因となって、直訳との開きが大きくなっている場合がある。しかし同時に、英語と日本語の言語上の差異、あるいは、その背景にある文化上の差異が要因となっている場合も多々ある。本論文で扱う授業では、このような「英語音声・英語字幕と日本語音声・日本語字幕のズレが比較的大きな箇所」に注目し、その箇所について活動を設定することで、「ことばへの気づき」を促す機会とする。

実践に際しては、まず授業者(1, 2, 3, 6章の執筆者)と共著者が協力して授業案、ワークシート、アンケートを作成した。その上で実践当日、授業者は授業案にしたがって授業を行い、実践後は共著者とともにワークシートとアンケートを分析し、記述を行った。学習者の記述を分析する際、一つの観点として導入したのは、生越(2008)が示した「領域」という考え方である。この中で生越はメタ言語能力を「音韻への気づき」、「単語への気づき」、「文法への気づき」、「語用上の気づき」の4領域に分類している。これは「気づき」というやや漠然とした概念を具体的に把握する手段として有効であると言える。このようにして本論

文では、「大学英語授業において、映画は『ことばへの気づき』を促す上で有効か」という問いについて検証を行いたい。

3. 実践の内容

3.1 対象

本実践の対象は、首都圏私立大学建築学科1年生29名、電気工学科1年生31名、2年生34名、機械工学科2年生31名、の4クラス計125名（履修登録者数）である。講座名は必修教養科目「A英語2」（1年生対象）と「B英語2」（2年生対象）であり、「英語1」がスピーキング中心、「英語3」がライティング中心であるのに対して、「英語2」はリーディングを中心に総合的な英語力の養成を目指す通年科目となっている。研究の対象とするのは2018年6月7日から6月29日の間に行われた各クラス4回（各90分）の授業である。この授業を履修する学生の多くは基本的な単語・文法・発音等の知識を有している。習熟度別のクラス編成にはなっていないため、英語力の差は存在するものの、どの学生も英語学習に一定の時間を割いてきたことがうかがえる。

3.2 年間シラバス上の位置づけ

「A英語2」及び「B英語2」では、授業担当者がそれぞれ授業目標を定め、それに合わせて使用教材を設定している。本実践の授業者は以下のような年間目標を定めた。

【年間目標】

- ① 単語の意味、文の構造を踏まえ、英文を理解することができる。
- ② 理解した内容を適切な日本語で表現することができる。
- ③ 内容（何が書いてあるか）だけでなく、表現方法（どう書いてあるか）について説明できる。
- ④ 自身で基礎的な英語表現を行うことができる。

本授業の特徴は文章の表現方法に焦点を当てた③であり、これは学習者が高等学校までに経験した国語授業との連続性を意識したものとなっている。文章の種類という観点から現行の高等学校学習指導要領「国語」を見ていくと、例えば、「現代文B」の目標は、「近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高める」（文部科学省2009: 29）となっている。

この箇所の解説には、「言語文化として価値が高く、現代の文化や思想に深くかかわるような文章はもちろん、現代の社会生活で必要となる実用的な文章や、翻訳の文章、近代以降の文語文及び演劇や映画の作品なども含めて考えることが大切である」（文部科学省2010a: 49）とあり、多様な種類の文章が示されている。

2018年に告示された高等学校学習指導要領「国語」では、このような多様な文章が解説ではなく学習指導要領本文に入ることになった。例えば、「論理国語」の項には「近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章」（文部科学省2018a: 35）といった例が示され、「文学国語」の項には「翻訳の文章、古典における文学的文章、近代以降の文語文、演劇や映画の作品及び文学などについての評論文」（文部科学省2018a: 38）と記されている。このような「国語」の方針を踏まえて、本授業では様々なジャンルの文章を扱うことで、母語と外国語を問わず、表現方法に対して敏感な感覚を持った学生を育てたいと考えた。そこで教科書は指定せず、独自に作成した配付資料を教材とすることにし、文章のジャンルを基準に年間計画を立てた。それが以下の「ジャンル別シラバス」である。

【教材】 下記の題材を元に作成した配付資料 【年間授業計画】

回	ジャンル
1	小説
2-3	レクチャー
4-5	洋楽 ドキュメンタリー
6	エッセイ
7-10	映画（本実践）
11-14	スピーチ
15	<前期試験>
16-17	絵本
18-20	レクチャー
21-24	映画
25	スピーチ
26-29	ミュージカル
30	<後期試験>

この「ジャンル別シラバス」により授業を行って6年目になるが、その間、学生の活動を促す上で有効であったと考えられる素材は残し、そうでなかったもの

は別の素材と入れ替えてきた。そうして残っているのが上記の9ジャンルである。どれも選定の際は他の素材とは異なった特徴を有しているよう配慮した。扱う順に説明していくと小説は元々日本語で書かれたもので、アニメーション映画になったことで有名になった作品の英訳である(後述)。日本の高校生が触れる日常的な事物がどう英訳されているかという観点から読むことができる。前期と後期に一度ずつ扱うレクチャーは、いずれもアメリカの有名大学における英語講義である。全世界に一般公開されたものだけあって、ある程度の専門性のある内容が平易な英語で表現されている。洋楽はメロディーを伴っている点が特徴であり、リズムに合うよう単語が選択されている。ここで扱うのは世界的に有名であったイギリスのロックバンドの一曲で、男女のやりとりが曖昧な言葉で表現されており、複数の解釈が可能な内容となっている。エッセイは大学英語教科書から取った説明文で、図表を含み、英語の論理構成について学ぶことができる。前期と後期で二度扱うスピーチは、一つがアメリカ人のスピーチ、もう一つはイギリス人のスピーチとなっている。どちらも慎重に言葉を選んだことがうかがわれる内容で、抑揚の付け方や間の取り方なども参考になる。絵本は朗読されることを前提に、リズムに配慮された言葉選びとなっている。授業で扱うのは世界中の言語に翻訳された有名絵本で、子ども向けの内容ではあるが、大人でも考えさせられる内容となっている。ミュージカルはセリフが音楽に合わせて発せられる点が特徴で、韻が多用されている。この中にあって映画はストーリーがあるという点では絵本や小説と共通し、映像と音声を伴う点ではレクチャーやスピーチと類似する。同じことはミュージカルについても言えるが、映画はセリフに音楽が伴っていない。フィクションではあるが、日常の言語使用に近いという点で、他のジャンルとは異なっていると言える。

本講座はこのような多様な素材を通して、英語運用能力とメタ言語能力を高めることを目指している。

3.3 使用する映画

今回の実践で使用するのは、2006年にアメリカで公開された映画『イルマーレ』である。この映画は2000年に韓国で作成された映画がリメイクされたもので、英題は*The Lake House*となっている。題にあるように、この映画の主な舞台になるのは湖畔の家であり、物語はそこにAlexが引っ越して来るところから始まる。ある日、Alexはかつての住人であった

Kateから手紙を受け取り、もし郵便が届いたら転送するよう依頼される。しかし、転送先に記された住所に行ってみると、そこはマンションの建設予定地であった。このような出来事が重なる中で二人は、2004年を生きるAlexと2006年を生きるKateが、時空を超えたやりとりをしていることに気づく。文通を続ける中で、二人は互いに惹かれ始め、ついには直接会う手段を模索し始める。

『イルマーレ』を教材に選んだ理由は三つある。第一の理由はこの映画の取り扱う「タイム・パラドックス」という問題が、学習者の関心を引きやすいという点である。物語の終盤で、Alexは同じ2004年を生きるKateに会うため、ある広場に向おうとする。そのときに、2006年のKateから手紙を受け取り、自身の未来について重要な情報を知ることになる。手紙の中でKateはその広場に行つてはいけないと言う。その手紙を手にAlexは、目の前の通りさえ渡れば、Kateに会える所までやってくる。しかし、手紙の助言にしたがって行動することは歴史を変えてしまうことを意味する。最後にAlexがその通りを渡るかどうか、この物語のクライマックスとなっている。

近年の映画で、同じ「タイム・パラドックス」の問題を扱った作品に『君の名は。』がある。この映画は2016年8月に公開されたもので、高校生の男女が主人公であったこともあり、10代の若者の多くが劇場に足を運んだ。そして、2017年6月に『イルマーレ』を扱った実践を行った際、「『君の名は。』に似ている」という声相次いだことで、担当する学生の大多数がその映画を鑑賞していることを知った。この点を踏まえ、2018年度の初講では、小説『君の名は。』の英訳と映画『君の名は。』の北米版を用いることにした。これにより、学生にとって身近な題材で年間授業への導入を行うとともに、後に『イルマーレ』を扱う際、テーマ的なつながりを意識することができるよう意図した。

第二の理由はこの映画が単なる娯楽映画ではなく、Jane Austenの*Persuasion*をストーリー展開の鍵とした、教養に寄与する作品であるという点である。上述した内容から、『イルマーレ』のテーマはtimeであると言えるが、このテーマにアプローチする上で重要な役割を果たしているのが*Persuasion*である。この作品はKateの愛読書となっており、物語の前半から何度も登場する。あるとき、KateはAlexにこの作品の主題はwaitingであると説明するが、実はその後のストーリー展開において、KateとAlex自身が「待つこと」

を余儀なくされることになる。つまり、waitingはtimeというメインテーマに対するサブテーマのような位置づけである。Jane Austenという作家と*Persuasion*という作品について知ることは、映画の理解を高め、教養を深める一助となる。

第三の理由はこの映画が教育上、支障となる描写がほとんどない作品であるという点である。本講座では『イルマーレ』を2017年度に用いただけでなく、それ以前にも度々、教材として使用していた。その中で性や暴力など、教室で視聴する上で問題となり得るような場面がほばないことを確認できていた。また同時に、英語教材として不適切なスラングの使用がほとんどないことも、この映画を使用することを後押しする材料となった。

3.4 指導目標

本実践では以下の二つを指導目標に定めた。

- ① 映像、音声、英語字幕、スクリプトを利用しながら、映画中の単語、文法について理解する。
- ② 英語音声・英語字幕と日本語音声・日本語字幕を比較することで、「ことばへの気づき」を促す。

3.5 授業展開

計4回の授業のうち、第1日の授業展開をまとめたのが以下の表である。

	授業展開	時間	活動形態
1	前回の解答用紙の返却 ワークシート1枚目の配布 解答用紙の配布	8分	
2	場面1の語句の理解	5分	
3	場面1の視聴 ワークシート2枚目の配布	12分	
4	Activity 1	10分	個人
5	発表	5分	
6	解答	8分	
7	場面2の語句の理解	5分	
8	場面2の視聴 ワークシート3枚目の配布	12分	
9	Activity 2	10分	個人
10	発表	5分	
11	解答	8分	
12	まとめ	2分	

上記の授業展開は全4回の授業においてほぼ共通で、「語句の確認(5分)→1場面の視聴(平均12分)→活動(10分)→発表・解説(13分)」という展開を

二回繰り返す形となっている。1場面の視聴時間が平均12分なのは、98分の映画を8場面に分けて視聴するからである。上で述べたように、学生の多くは基本的な単語・文法・発音等の知識を有していることから、映画の視聴は英語音声・英語字幕を基本とした。ただし、難語句を複数含む場面では一時的に日本語字幕に切り替え、学習者が内容を理解できるよう配慮した。

3.6 教材の構成

毎回の授業において、配付資料はワークシート3枚と解答用紙1枚になっている。まず、ワークシートの1枚目を配布するのは授業冒頭である。この中には最初の視聴場面について、【英語字幕中の語句】という欄を設け、重要語句及び難語句を掲載している。語句の数は合わせて10から20個程度であり、必須語句の意味が空欄になっている。次に、ワークシートの2枚目を配布するのは最初の場面の視聴後である。これには、最初の視聴場面から抜粋した【スクリプト】、それについての【Activity】、次の視聴場面の【英語字幕中の語句】、の三つを掲載している。【スクリプト】の長さは10から20行程度であり、10分ほどで読解が可能な分量となっている。また、【Activity】の欄にはおおむね二種類の設問を設定してある。一つは「ことばへの気づき」を促すことを意図した設問で、それは「理解」の側面に焦点を当てた問題と、「表現」の側面に焦点を当てた問題の二つから構成される。具体的な文言は前者が、

- (1) 日本語に訳そう。
- (2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
- (3) 日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

というもので、後者が、

- (1) 下線部に相応しい英文を記入しよう。
- (2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
- (3) 英語音声・英語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

というものとなっている。もう一つの設問は単語・文法の知識を問う問題で、空欄補充問題や整序問題などから成る。最後に、ワークシートの3枚目を配布するのは2回目の視聴後である。これには2回目の視聴場面から抜粋した【スクリプト】と【Activity】の二つの欄を設けてある。

3.7 活動の詳細

授業では映画全体を8つの場面に分けた。ここではまず、設問を設定したく場面1>からく場面7>について、実際の【スクリプト】と【Activity】を掲載し、場面の概要を説明する。その上で、「ことばへの気づき」を促すことを目指した設問に対して、どのような解説を行ったかを記していく(単語・文法の知識を問う設問の解説は割愛することとする)。

第1日<場面1>

【スクリプト】

Klycznski : You'll be covering 22 patients on rounds today, this floor and next.

Kate : Twenty-two?

Klycznski : ① _____ . If you get into trouble, beep me, don't make it a habit. The med students will help you out with scutwork. What's he doing here? I ordered an MRI, stat.

Woman : Transport said about four hours.

Klycznski : He could be (②) in four hours. Never mind. Dr. Forster, MRI. A right, two lefts, elevator to two.

Kate : Okay.

Klycznski : Follow the signs. Hustle back here for rounds

Kate : Dr. Kly...

Patient : (③) me somewhere?

Kate : I certainly hope so, sir. How are you feeling today?

Patient : Am...? Am I gonna make it?

Kate : Yes. Absolutely. (3:58-4:35)

【Activity】

1. 下線部①について、

- (1) 下線部に相応しい英文を記入しよう。
- (2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
- (3) 英語音声・英語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

2. 括弧②③に入る語をそれぞれ選びなさい。

②ア happy イ all right ウ dead エ confused

③ア Are you taking イ Were you taking

ウ Have you taken エ Have you been taking

Klycznskiから、担当患者の人数は22人であると説明を受けたKateは、「22人?」と聞き返す。それに対するKlycznskiのセリフについて設定したのが下線部①である。これは空所に相応しい英文を自分で考えて補充した上で、何を手がかりにしたかを記述する問題となっている。

解説では(1)について、解答例となるのは、We are not so busy today. といったような英文であることを示した。その際に(2)の解答例としては、スクリプトに依拠した解答と、映像・音声に依拠した解答の二例を挙げた。前者として示したのは、「赴任したばかりのKateは院内の慌ただしさに驚いた様子だが、Klycznskiにとってそのことは日常茶飯事であること」という解答である。また、後者としては、「Kateは院内の忙しさに戸惑った表情を浮かべ、自信がなさそうに話す、ベテランのKlycznskiは表情を変えず、冷静に話していること」といった解答例を与えた。

次に提示するのは下線部①に入る実際のセリフで、それはQuiet morning.となっている。これは「静かな朝よ」と言うことで、「今日の患者は少ない」ということを伝える発話となっている。実際のセリフを英語音声・英語字幕で視聴し直した後は、設定を日本語字幕に切り替え、それが「少ない方よ」(4:03)となっていることを示した。これはQuiet morning.の直訳ではなく、そのセリフの意味を伝えた字幕となっている。(3)については、学生の解答を見た上で特徴的な解答があればフィードバックをすると伝え、解答例は挙げていない。これはく場面2>以降も同様なので、以下では(3)への言及は割愛する。学生の解答については第4章で記述し、第5章で考察を行う。

第1日<場面2>

【スクリプト】

Alex : Dear Ms. Forster. I went to 1620 North Recine, and it's not there. It's just a construction site. From the pictures it looks nice, but not for another 18 months. What am I missing here? Maybe you got the address wrong, because you got the date wrong, too.

Kate : ①You really wanna play this game. If you are truly in the year 2004...then...be forewarned. Remember that day? You were not happy. Remember that? I know.

<場面1>は医師であるKateが新しい病院に赴任する場面である。この場面の冒頭で、上司の

Kate : Okay, my mystery correspondent, I get it. Just in case you really are ② (you / and / where / think / are/ you /when)...you'll need this. There was a freak late snow that spring and everyone got sick. So plenty of rest, lots of fluids. Doctor's orders.

Alex : Snow. Right. Yeah, come to papa. (17:18-19:09)

【Activity】

3. 下線部①について、

- (1) 日本語に訳そう。
- (2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
- (3) 日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

4. 下線部②を正しい語順に並び替えよう。

<場面2>はAlexとKateが手紙をやりとりする場面である。この場面の冒頭でAlexは、Kateの記した転送先の住所が間違っていることを伝える。この時点で二人は互いが異なった時間を生きていることに気づいていない。Kateは2004年にいると主張するAlexに対してあきれながらも、自身の記憶から、あなたが本当に2004年にいるのなら、この日に雪が降るから注意して、と助言を送る。これに続く場面ではKateの言ったように本当に雪が降り、Alexは驚くことになるのである。

解説ではまず(1)の直訳が、「あなたは本当にこんなおふざけがしたいのね」といった内容であることを示す。次に(2)の解答例として、スクリプトに依拠した解答と、映像・音声に依拠した解答の二つを挙げる。前者に該当する解答例としては、「現在は2004年だと言いつけるAlexに対して、Kateはあきれていること」といった解答を示し、後者にあたる解答例としては、「Alexに対してKateはあきれたような表情を浮かべ、うんざりとした口調で話しをしていること」といった解答を提示した。

続いて取り上げるのは、この箇所の日本語音声と日本語字幕である。それは前者が「もうこんなのに付き合ってるんじゃない」、後者が「ゲームはいやだけど」となっている(17:50)。両者はニュアンスに若干の違いがあり、日本語音声はうんざりとした感じが強く出た表現となっているのに対し、日本語字幕はうんざりとしながらもAlexとのやりとりを続け、その発言の信憑性を確かめようという意志がうかがわれる表現となっている。

第2日<場面3>

【スクリプト】

(Looking at the lake house)

Henry : Looks smaller. When did he complete it?

Alex : You weren't born yet, and I was 8.

Henry : Corbusier meets Frank Lloyd Wright. You know, Dad played cards with both of them.

Alex : Sharing a joint.

Henry : Yeah, well...

(Looking at the lake)

Henry : Can't swim.

Alex : There should be a stairway down to the water, a porch, a deck. Here you are in a... in a box. A glass box with a view to everything that's around you...but you can't touch it. No interconnection between you and (①) you're looking at.

Henry : I don't know, you know. He's got this big maple growing...right in the middle of the house.

Alex : Containment. Containment and control. ② This house is about ownership, not connection. I mean it's beautiful. Seductive, even. But it's incomplete. It was all about him. Dad knew how to build a house, not a home. But you know...I think he wants us to do what he couldn't. But admitting that...would mean admitting that he came up short in some way...that he could do more. And that tortures him.

Henry : Do you remember (③) here with Mom?

Alex : I remember she tried to make it work here...with us...with him. (33:48-35:46)

【Activity】

1. 括弧①③に入る語をそれぞれ選びなさい。

① ア when イ where ウ why エ what

③ ア being イ to be

ウ having being エ me

2. 下線部②について、

(1) 日本語に訳そう。

(2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。

(3) 日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

<場面 3>は Alex と弟の Henry が会話をする場面である。この場面の冒頭で、二人は外から湖畔の家を眺めている。この家は二人の父親 Simon が作ったもので、直前の場面から、Alex は家庭を顧みなかった Simon に対して、わだかまりを抱いていることがわかる。次に二人は家の近くに移動し、湖の周りにある建築物について話をする。Alex は父親の作った建築物に対して批判的であり、「どれも目には見えるが、触れられない」といった内容のことを述べる。それにづくのが下線部②である。

解説では(1)について、「この家は所有についてのものであり、つながりについてのものではない」という直訳から、「この家のコンセプトは所有であり、つながりではない」といった形で、訳に工夫が必要であることを説明する。(2)については、スクリプトに注目して、「Alex は父親との間に確執があり、建築を作るのはうまいが、家庭を作るのには失敗したと知っていること」という解答を示した。また、映像・音声に着目して、「Alex は家族を大事にしなかった父親について、苦々しい表情を浮かべながら、強い口調で批判をすること」という解答例も提示した。

次に取り上げるのは、この箇所の日本語音声と日本語字幕である。それは前者が「この家のコンセプトは『所有』で『絆』じゃない」、後者が「『所有』であって『関わり』じゃない」となっている (34: 52)。どちらも ownership の訳は「所有」となっているが、connection の訳は「絆」と「関わり」に分かれている。この二つの訳以外にも、解答例として挙げたように、「つながり」といった訳が可能である。ここでは「絆」と「つながり」を比較し、前者が父親と家族との関係を連想させ、後者が父親の建築と自然との関係を想起させることを説明した。その上で多義語である connection をどう訳すかで、それが何と何を結ぶかについて、解釈が表われるという解説を行った。

第 2 日<場面 4>

【スクリプト】

(In the letter)

Kate : My dearest Mr. Wyler. Are you (①) to play a game with me? Two years ago today, I was taking the 145 train to Madison from the Riverside station and forgot something there. It was a gift from my father. If you find it, can you please put it in the mailbox? It would mean a lot. Yours, Kate.

(At the Riverside station)

Station Staff : Final call for the 5:46 to Madison. All aboard.

Morgan : I'll call you.

(In the letter)

Alex : Kate, I found it. I have it with me. One day I'll get it to you. Trust me. I know how important it is to you. You might not remember, but ② _____

_____. At least, I saw you. You never told me how beautiful you are.

Kate : Well, maybe you saw somebody else. That was a bad hair year for me.

Alex : Long brown hair. Gentle unguarded eyes.

Kate : Okay, okay, okay. You saw me. But I still don't know what you look like.

Alex : Well, (③) don't we just get together in the future...and you can let me know what you think.

Kate : It's a date. Okay. (35:46-39:23)

【Activity】

3. 括弧①③に入る語をそれぞれ選びなさい。

① ア reluctant イ willing ウ about エ up

③ ア when イ where ウ why エ what

4. 下線部②について、

(1) 下線部に相応しい英文を記入しよう。

(2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。

(3) 英語音声・英語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

<場面 4>は Kate が駅に忘れた *Persuasion* を Alex が取りに行く場面である。Alex が指定された時間に駅のホームに行くと、2004年の Kate は恋人と一緒にいた。恋人に別れを告げた後、Kate が列車に乗り込むと、すぐに扉が閉まる。そこで Kate はかばんに *Persuasion* がいないことに気づくが、列車は動き始めてしまう。Alex はベンチに残された本を手に取り、ゆっくりと加速していく列車を追いかける。窓越しに一瞬、二人の目が合うが列車は駅を離れていってしまう。解説では(1)に入る表現が we saw each other. であることを示した。その際、(2)で根拠とできるのは映像であると説明し、車窓越しに目が合う場面をあらためて視聴した。

第3日<場面5>

【スクリプト】

Kate : When I was....When I was 16...I was completely in love with this guy. He played guitar...and I ran away from home...and went to San Francisco so I could go live with him. Yeah, ①(me / I / voice / had / convinced / beautiful / a / he)...and I dreamed of becoming a singer.

Alex : I love San Francisco.

Kate : Yeah, he was—he was my first love. Probably the only one.

Alex : He must have been a great guy.

Kate : I don't—I don't know—he may have been. ②_____ . Yeah. Truth is, I—I can't even remember what he looked like.

Alex : Really?

Kate : Yeah.

Alex : Then that's too bad.

Kate : My dad—My dad showed up, actually.

Alex : You were in trouble.

Kate : He came in. Yeah, I was in trouble. He yanked me back to Chicago. (51:40-55:12)

【Activity】

1. 下線部①を正しい語順に並び替えよう。
2. 下線部②について,
 - (1) 下線部に相応しい英文を記入しよう。
 - (2) (1)に取り組む際, 映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
 - (3) 英語音声・英語字幕と比較して, 気づいたことを書こう。

<場面5>は2004年に開かれたKateの誕生日パーティーで, AlexとKateが会話を交わす場面である。この場面まで, Alexが文通を続けているのは2006年のKateであり, 同じ時間を生きる2004年のKateとは初対面である。しかし, Alexは2006年のKateとのやりとりから, すでに趣味や愛読書などを把握しており, 初めての会話も「*Persuasion*を読んだことはある?」と切り出すことで, Kateと打ち解けることに成功する。続けてAlexはこれまでの恋愛について尋ね, Kateは自身が16歳であったときの経験について話し始める。Kateの初恋の少年について聞いたAlexは, 「いい男だったんだ」とコメントするが, それに対するKateの反応にあたるのが下線部②である。

解説では(1)に入る実際のセリフが, It didn't last long enough for me to find out.であることを示し, 文法・語法に関する説明を行った。(2)としては, まずスクリプトに基づいた解答例として, 「Kateは続くセリフで『顔も覚えていない』と言っていて, 少年との交際期間が短かったことがわかること」という解答を示した。一方, 映像・音声について, Kateは「いい男だったんだ?」と聞かれ, 上のセリフを口にする際, 両手を軽く広げ, 「わからない」という意味のジェスチャーをする。この映像を根拠に, 『『いい男だったんだ?』と聞かれたとき, Kateは『わからない』という意味のジェスチャーをしていて, 少年と付き合った時間は短いと思われること』という解答も提示した。

第3日<場面6>

【スクリプト】

(At the hospital)

Kate : Hey. I have an emergency. Take my shift. Please.

(On the phone)

Alex : Hello.

Klycznski : Mr. Wylar?

Alex : Yes.

Klycznski : This is Dr. Klycznski at Chicago City Hospital. ①(____)(____) I have some difficult news for you.

(In the letter)

Kate : I'm so sorry, Alex. I wish somehow I could be there with you...that we could sit together and look out over the water and the light...in this house your father built. ②I could be a shoulder for you like you've been for me. And tell you that everything is gonna be okay. If I could do one thing for you today...from here...one small, simple thing from the future...I hope this is it. It won't be published for a couple of years...but I don't think you should have to wait that long. ③(helps / it / hope / I / you / know / much / how) you were loved. (1:05:35-1:08:09)

【Activity】

3. 下線部①が「残念なお知らせがあります」という意味になるよう単語を補充しよう。
4. 下線部②について,

- (1) 日本語に訳そう。
 (2) (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
 (3) 日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。
 5. 下線部③を正しい語順に並び替えよう。

<場面6>は父親を亡くした Alex を Kate が慰める場面である。この場面の冒頭、Alex は父親の担当医である Klycznski から電話を受け、父 Simon が亡くなったことを知る。ちょうどその頃、Kate は Simon の死亡証明書に記された日付が2年前のその日であることに気づき、急いで Alex に手紙を送る。その手紙の一節が下線部②である。

解説では(1)について、①の直訳が「あなたがいつもそうしてくれたように、今回は私があなたの支えになれるといいのに」であることを伝えた。その上で、この箇所の日本語音声で「今回は私があなたの支えになってー」、日本語字幕が「あなたにこの肩を貸しー」となっていることを示した (1:07:41)。ポイントは shoulder の訳であり、この名詞には「肩」の他に「支え」という意味がある。日本語音声はこの訳をそのまま使い、日本語字幕は「肩を貸す」という表現にすることで、全体で「支えになる」という意味を表している。

(2)について、スクリプト上の根拠となるのは、I wish somehow I could be there with you... という記述である。これは「あなたのそばにいられたらいいのに」という意味であり、この記述を根拠に、「Kate は Simon の死を悲しみ、Alex の支えになりたいと考えていること」という解答例を示した。また、映像・音声に基づいた解答例としては、「この場面では手紙を読み上げる Kate の姿が映し出されるが、その声色と表情から、Alex の父が亡くなったのを、自分のことのように悲しんでいるのがわかること」といった解答も提示した。

第4日<場面7>

【スクリプト】

(In the letter)

Alex : Don't give up on me, Kate. What about *Persuasion*? You told me. They wait. They meet again, they have another chance.

Kate : Life is not a book, Alex. And it can be (①) in a second. I was having lunch with my mother at Daley Plaza...and a man was killed right in front of me. He died in my arms. And I thought : "It can't end just like that on Valentine's Day." I thought about all the people who love him, waiting at home...who will never see him again. And then I thought : "What if there is no one?" What if you live your whole life and no one is waiting? So I drove to the lake house looking for any kind of answer. And I found you. And I let myself get lost. Lost in this beautiful fantasy where time (②) still. But it's not real, Alex. I have to learn to live the life that I have got. Please don't write anymore. Don't try to find me. ③ Let me let you go. (1:14:00-1:15:12)

【Activity】

- 括弧①に前後の流れに合うよう単語を補充しよう。
- 括弧②に入る語を以下から選びなさい。
ア came イ went ウ stood エ remained
- 下線部③について、
 - 日本語に訳そう。
 - (1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。
 - 日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。

<場面7>はKateがAlexに別れを伝える場面である。この直前の場面でAlexとKateは、Kateのいる2006年で会う約束をする。しかし、Kateがいくら待っても、Alexが姿を現わすことはなかった。このことがきっかけとなって、KateはAlexと別れる決意をし、そのことをAlexに伝える。しかし、あきらめ切れないAlexは*Persuasion*の例を挙げながら、Kateに思いとどまるよう伝える。それでもKateの決意は固く、自身の目の前で交通事故に遭い、亡くなった男性の例を引き合いに出して、人生は一瞬で終わってしまうこ

ともあるのだから、それぞれの人生を生きなければならぬと答える。それに続くのが下線部③である。

解説では(1)について、この箇所が「あなたのことを忘れさせて」という意味になることを説明する。次に(2)について、スクリプトに基づいた解答例としては、直前のPlease don't write anymore.を根拠に、「KateはAlexに対して、もうこれ以上手紙は書かずに、自分のことは忘れて欲しいと考えていること」という解答を示した。また、映像と音声に基づいた解答例として、「この手紙を読み上げるKateはつらそうな表情を浮かべながらも、声色は毅然としていて、Alexとの別れに対する強い決意がうかがわれること」という解答も提示した。

4. 実践の結果

4.1 解答用紙の記述

本研究の対象とする活動は、3.6及び3.7でも述べたように、日本語訳に関する活動と英作文に関する活動である。それぞれ以下の3種類の設問に取り組んでもらうこととした。日本語訳に関する「(1)日本語に訳そう。」「(2)(1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。」「(3)日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。」の3問と、英作文に関する「(1)下線部に相応しい英文を記入しよう。」「(2)(1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたかを記入しよう。」「(3)英語音声・英語字幕と比較して、気づいたことを書こう。」の3問である（実際の解答用紙については、末尾の資料を参照されたい）。

上記の設問のうち、本節では、「映画は『ことばへの気づき』を促す上で有効か」という本研究での問いを踏まえ、日本語訳と英作文の(2)と(3)に対する学生の記述に着目する。(2)からは学生が映画から得られる情報を手がかりにしていた様子を、(3)からは学生がどのような言葉への気づきを得ていたのかを確認していく。

4.1.1 手がかりにした映画の要素

学生は和訳や英作文の設問に取り組む際、映画の何をどのように参考にしていたのだろうか。その実態を調査するため、設問(2)「(1)に取り組む際、映画の何をどのように手がかりにしたか記入しよう。」に対する学生の解答の中から、映画の要素に関する言及が見られた記述を抽出することとした。Table 1は、第1日から

第4日までの設問(2)に対する学生の解答例である。

Table 1 「映画の何をどのように手がかりにしたか」に対する学生の記述

実施日	設問	解答例
第1日	1(2)	「Kateが22の人数に驚きの声を上げたこと②とKlycznskiがもし問題があったら呼んでっていった⑤ことから」 「雰囲気③」 「前のセリフでKateが何かに驚いていて①・②・⑤、後のセリフでそれをフォローしているから。⑤」 「Kateが22人という数字に驚いていて、①・②・④Klycznskiが何かあれば手伝うよと言っていた⑤から。」 「今日は平穏な朝だという文脈③で、病院の様子にKlycznskiは当然のような素振り①・④であるが、Kateは驚いた様子①・②・④である。」 「院内が忙しそうだった③から」
	3(2)	「ケイトが起きている事態を全く信じていない様子①・②・④を読みとった」 「KateはAlexとの不思議なやりとりで半ばあきれた様子①・②・④であったこと」
第2日	2(2)	「houseとhomeの対比⑤」 「②以降のAlexの発言⑤の部分から考えた」 「声のトーン②」
	4(2)	「②の次にat leastと強調している感じ②・⑤がでている。」 「アレックスが本を持ち、それをケイトがみていたシーン③より」
第3日	2(2)	「ケイトの表情①」 「ケイトが寂しそうに語っていたこと。①・②彼がどんなだったかも覚えていないと言っている⑤から。」 「Kateの彼がどんなだったか思い出せないという台詞。⑤」
	4(2)	「アレックスにとってつらい場面③だったから。」 「今までのKateとAlexとの関係③」 「前後のセリフ③・⑤でKateがAlexを元気づけようとしていること。」
第4日	3(2)	「話の流れ③、声の抑揚②、前のシーン③」 「2年後にAlexが来てくれなくてショックを受けるKateの様子。①・②・④」 「別れる雰囲気がレストランの状況から読み取れた③」 「前の“Don't try to find me.”③・⑤で別れを予見した。」

上記の記述を整理すると、問いに答える上で参考にしていたのは、①表情、②声（トーン、イントネーション、話し方）、③話の文脈・背景・雰囲気、④身振り手振り・行動、⑤セリフといったものである。なお、

この①から⑤の項目は Table 4. 1 の下線部の番号と対応している。この 5 つの点を、映画の構成要素である映像、音声、文字から読み取り、問題を解くための手がかりとしていたと言える。その際、「ケイトの表情①」という記述例に示されているように、主に映像を頼りにしていた様子や、「ケイトが起こっている事態を全く信じていない様子①・②・④を読みとった」という記述例に表れているように、映像と音声を組み合わせていた様子が確認できる。このように、映画の要素を個別に、あるいは総合的に踏まえながら、各場面に即した表現を作ろうとしていたことがわかる。

4. 1. 2 「ことばへの気づき」に関する記述

先述した点を手がかりにし、設問に取り組む中で、学生はどのような「ことばへの気づき」を得ていたのだろうか。ここでは、第 1 日から第 4 日までに扱った設問(3)に対する学生の記述を示しながら、その様子を確認していく。Table 2 は、各解答用紙に含めた「(3)英語音声・英語字幕と比較して、気づいたことを書こう。」及び「(3)日本語音声・日本語字幕と比較して、気づいたことを書こう。」に対する学生の記述である。

Table 2 「気づいたことを書こう」に対する学生の記述

実施日	設問	解答例
第 1 日	1(3)	「英語は「数量」の表現は使っていないが、日本語は「数量」の表現を使っている。①」 「英語では直接的な表現ではなく抽象的なことで意味を伝えようとしているが、日本語は直接表現となっている。②」
	3(3)	「日本語と英語で、同じニュアンスを表現するのに全く違うアプローチ②だと思った。」
第 2 日	2(3)	「前後の関係から考えて、意味を付け加えなければならない。②」
	4(3)	「互いに見たではなく、よりその状況が分かりやすいように目が合ったと表現されていた。①アレックスはケイトを確実に認識していることが分かる。」 「see は『会う』と訳されると思っていたが、字幕では『目が合う』と訳されていた。①」

第 3 日	2(3)	「“didn't last long”の直訳『長く続かなかった』は日本語音声、字幕に含まれていなかった。確かに日本語で「～するほど長く続かなかった」という言いまわしはしないから、英語独特の言いまわしである①と思った。」 「『破局した』を長くは続かなかったと表現し、直接的な表現ではない。①英語では、意味上の主語が明記されている。」
	4(3)	「日本語の方が心理的な意味で言葉を使うことが多い①、もしくは、英語の方が直接のものを指すことが多いかなと感じた。①」
第 4 日	3(3)	「『私の目の前からいなくなって』という意味ではなくて『記憶の中からいなくなって』という意味が奥が深いなと思った。『忘れさせて』という表現に、ケイトの心の葛藤のようなケイトの心情が表れていると思う。すごく主観的な表現。①」 「直訳だと意味が伝わりにくいので、Kateの気持ちをより理解できるように訳している。“go”はただ行くというのではなく、Kateの心から出て行くというような意味。①」 「文化が違うことで、言葉の表現もかなり違ってくる。直訳からはなんとなく忘れさせてという意味を感じるが、日本語には正しくない表現なので、意味的に訳した。②」 「英語には忘れるという意味の語はなかったが使っていたため、文脈を考慮した意味の幅の広さを感じた。②」 「直訳では不自然だった内容が、日本語訳でしっかりと意味のある内容に変わった。Goが「忘れさせて」になる発想が無かった。①」

これらの記述を整理すると、大きく分けて、①単語に対する気づきと②文脈を踏まえることに対する気づき、という 2 種類の「ことばへの気づき」が生まれていたと言える。なお、この 2 項目は、Table 2 の下線部の番号と対応している。それぞれの気づきについて具体的に見ていきたい。まず、①に該当するのは、単語の意味についての気づきを確認できるものである。例えば、Table 2 の第 2 日 4(3)の「see は『会う』と訳されると思っていたが、字幕では『目が合う』と訳されていた。①」である。この学生の記述には、それまで一義的にしか捉えていなかった“see”の意味に関して、自分が予想していた意味とは別の類似した意味が存在するという事に気づいたことが示されている。次に、②に該当するのは、表現とそれが使われている文脈との関係についての気づきが見られたものである。Table 2 の第 4 日 3(3)の「英語には忘れるという意味の

語はなかったが使っていたため、文脈を考慮した意味の幅の広さを感じた。②」がその例である。この記述には、“Let me let you go.”に対応する日本語字幕・音声から得られる訳例が「あなたを忘れさせて」であったことに對し、自分で英文を訳した段階では思い浮かばなかった「忘れる」という表現が使われていることを知る過程で、文字通りではない表現が文脈によっては適切な表現となることを学んだことが示されている。

4.2 アンケートの回答

最終日には、全4回の実践を振り返った上で記入が求められるアンケートを実施した。このアンケートは自由記述式で、その問いは「①全4回の授業を通じ、訳や英作を行う際、映画の何がどのように役立ったと思いますか？」と「②全4回の授業を通じ、自分の解答と英語音声・英語字幕や日本語音声・日本語字幕を比較することで、どのようなことを学びましたか？」の2項目である（実際のアンケート用紙は末尾の資料を参照されたい）。本節では、これらに対する学生の回答を見ていくことで、映画のどのような要素が役に立ったと感じていたのかを確認し、どのようなことばへの気づきが生まれていたのかを示したい。

4.2.1 解答の際に参考にした映画の要素

学生は全4回の実践を振り返る中で、映画のどのような要素が和訳や英作を行うのに役立ったと感じていたのだろうか。その答えを得るため、アンケート項目①「全4回の授業を通じ、訳や英作を行う際、映画の何がどのように役立ったと思いますか？」の回答欄に映画の特徴について言及している学生の記述を見ていくこととした。Table 3は、その記述例である。

Table 3 アンケート項目①に対する学生の記述例

「登場人物の仕草⑤、背景の様子③、音楽⑦」
 「前後の描写③や演者の話し方②とイントネーション②」
 「身振り手振り⑤や表情①、音楽⑦などの演出」
 「前後のシーン③や今までの流れ③、本人の性別や年齢、性格④などが、日本語訳をするときの口調を決めるのに役立ったと思う。」
 「訳、英作ともに単にそのままの日本語や英語ではなく、前後関係③から意味を考え、それを落とし込んでいくことが大事だと分かった。」
 「全て直訳するのではなく、雰囲気③、場面③、その登場人物が言いそうなセリフかどうか④を考えながら訳すのが大切であると思いました。あるセリフを言ったときの表情①も参考になると思いました。」
 「BGM⑦や俳優の表情①や身ぶり手ぶり⑤」

「直訳ではなく、話し手の口調②やその場の雰囲気③に合わせて訳すことが大事であると思う。」
 「場面や状況③、声のトーン②が訳の助けになり、また、逆にそれで訳も大きく変わったと思った。」
 「1文1文が独立しているわけではなく、文章全体や文の流れが重要③になっている。前の文との関連で意味がとりやすくなっている文というもある。」
 「(1)単語：映画に出た美しい単語⑥がたくさんある。これらの単語は英作に役立つと思う。(2)話す習慣の違い：英語の文法と日本語はかなり違うので、翻訳するときは、一翻訳するのではなく、意味を踏まえて翻訳するべき③である。(3)上下の文を理解しながら翻訳：“come on”などのいろんな意味がある単語に対して、上下の文を踏まえて翻訳したほうがいいということがわかった。③これは今後の翻訳に役に立つと思う。」
 「今まで、文章形式の英語ぐらいでしか英語とは関わることがなかったので、今回このような映画で英語と関わるととても良かった。映像①・③・⑤で見ると訳と英作がとてもやりやすかった感覚があった。」
 「英文にはない表情①、行動⑤、語調②から、分からない分のニュアンスが何となくつかめる。」
 「映画の雰囲気③や登場人物の話し方②、またそこまでの話の展開③など、映画の様々な要素が翻訳に役立つと感じた。」
 「小説と違って文字だけでなく映像①・③・⑤があるので文をイメージしやすい。多分、文字だけだと時間の関係がわかっていない気がする」

上記の記述から、設問に取り組む上で役立っていたのは、①表情、②声（トーン、イントネーション、話し方）、③話の文脈・背景・雰囲気、④登場人物の特徴（性別、年齢、性格など）、⑤身振り手振り・行動、⑥セリフ、⑦音楽といったものであることが整理できる。この結果は、4.1.1で示した解答用紙の記述の結果とほぼ重なっているが、④登場人物の特徴（性別、年齢、性格など）と⑦音楽に関する記述が見られた点が、本アンケート結果の特徴である。このアンケートが全実践を終えた段階で実施されたことを考慮すると、本実践を積み重ねていく過程で、単に直訳をしたり文法的にのみ正しい英作文を作ったりするだけでなく、登場人物の特徴や音楽が演出する場面の様子も踏まえて日本語訳や英作文を作ることの重要性に気づくことができたことが表れた結果だと言えるのではないだろうか。特に、性別、年齢、性格といった登場人物の特徴に関しては、セリフとして作られた英文によって表現されているのはもちろんのこと、それが映像や音声でも表現されることで、より明確に表されることが映画の特色の一つである。この活動を通して、学生らは、映画の映像、音声、文字によって表されている情報をできるだけ多くの視点から集めることが文脈に即した表現を作る上で大切だと捉えられるようになったと言える。

4.2.2 「ことばへの気づき」に関する回答

前述したアンケート項目①に続き、次の項目では、「②全4回の授業を通じ、自分の解答と英語音声・英語字幕や日本語音声・日本語字幕を比較することで、どのようなことを学びましたか?」という質問に回答してもらうこととした。

ここでは、このアンケート項目②に対する記述を見ていくことで、学生が全4回の実践を振り返る中で、自身の「ことばへの気づき」をどのように捉えていたのかを確認していきたい。Table 4は、アンケート項目②の回答欄に記された学生の記述例である。

Table 4 アンケート項目②に対する学生の記述例

「より表現をなめらかにする方法を学んだ②」
 「日本語に訳すのは、ただ単に英語の文字を見ればよいのではなく、映画の心情をきちんと考えなければならぬ②のだと思った。」
 「直訳からちょっと考えて訳さないと意味が通らないんだなと思いました。①・②」
 「自分の訳は直訳に近かったけど、日本語音声や日本語字幕はかなり意識していて、より日本語らしかった。映画の流れなどから想像し、より場面に合った日本語らしく訳することを意識することを学んだ。②」
 「直訳はほぼ見当たらず、流れを考えた一つの物語として破たんしないような訳がなされていた。②」
 「少しのズレから大幅なズレまで訳が異なることを知れたことはとても良かった。①」
 「違う国の言葉の文法や単語、慣習をお互いに共通している部分で探して当てはめて、なおかつ簡潔に表現している。①・②」
 「英語は直訳だけでは訳せないなとあらためて思った。今後は広い視野で英語を捉えたいと思った。①・②」
 「直訳に、人物の感情、前後の文脈を加味したうえで意味を与えて始めて訳になっていた。②」
 「映画のセリフは物語の展開や登場人物に合わせて決められており、翻訳ではそういった要素を汲み上げて、より自然な伝わりやすい、元の文の意味を失わないよう訳することが大切②だと感じた。」

上記の学生の回答を整理すると、4.1.2で示した解答用紙の結果と同様に、①単語に対する気づきと②文脈を踏まえることに対する気づきの2種類に分けられる結果となった。それぞれの気づきについて具体的に見ていきたい。まず、①に該当する「少しのズレから大幅なズレまで訳が異なることを知れたことはとても良かった。①」という記述からは、既知の単語の意味についての理解が深まったことや新たな単語の意味について学ぶことができたことがわかる。②に関しては、「日本語に訳すのは、ただ単に英語の文字を見ればよいのではなく、映画の心情をきちんと考えなければならない②のだと思った。」や「直訳はほぼ見当たらず、流れを考えた一つの物語として破たんしない

ような訳がなされていた。②」などがその例である。前者については、登場人物のセリフの語句だけに着目するのではなく、その背景にある心情を捉えることで発話の意図を理解することが、自然な訳を作る上で大切であることを学んだことが示されている。後者からは、自分の解答と字幕などの訳例を比較する中で、発話されている英文を一貫性のあるまとまりとして捉えることの必要性を学んだことがわかる。

5. 考察

本論文の目的は、映画を用いた「ことばへの気づき」を促す大学英語授業について検討することであった。そのため、まず、第3章では、全4回の実践の内容を詳細に示した。

続いて、第4章では、その実践の結果を解答用紙の記述とアンケートの回答より示した。それらをまとめると、次の2つのことが得られたと言える。第一に、学生が映画の映像、音声、文字から何を読み取り、解答の際の手がかりとしたのかを、4.1.1で示した設問(2)に対する記述と4.2.1で述べたアンケート項目①に対する回答より確認できたということである。第二に、どのような「ことばへの気づき」が見られたのかが、4.1.2で示した設問(3)に対する記述と4.2.2で述べたアンケート項目②に対する回答より整理されたということである。本実践で見られた「ことばへの気づき」は大きく分けて①単語に対する気づきと②文脈を踏まえることに対する気づきであると第4章で述べたが、これらは、メタ言語能力の「領域」という考え方と照らし合わせることも可能だろう。メタ言語能力の「領域」については、生越(2008)が、1)「音韻への気づき」、2)「単語への気づき」、3)「文法への気づき」、4)「語用上の気づき」、の4つに分類している。これを踏まえるなら、本論文で確認できた2種類の学生の気づきは、この4領域のうち2)「単語への気づき」と4)「語用上の気づき」に該当するものと言える。そう考えると、本研究は、映画を用いてメタ言語能力の育成に資する授業の一例を示すことができたという意味で、映画の教材としての強みを示すことができるものとなった。

上記の結果が得られたことに加え、解答用紙の感想欄にも映画や本実践での活動に関する前向きな意見を残していた学生がいたことについても触れておきたい。「映画を通じて、日常会話での英語の感じがどういった語感、表現になるのかの理解が深まった。」と

いう記述がその一例である。この学生は、「英語の感じ」、「語感」、「表現」などという言葉を用いて感想を述べているが、言い換えるなら、英語表現とそれが使われる場面との関係を、映画を通じて学ぶことができたということだろう。もちろん、表現の適切さを学ぶことのできる教材は、映画以外にも存在する。しかし、本実践で得られた学生の声は、英語が発話されている場面を想像するのに必要な材料を多くは持ち合わせていない外国語学習者にとって、視覚的、聴覚的な情報を与えてくれる映画がいかに英文の理解の助けとなっていたかを確認させてくれた。さまざまな制限のある外国語学習の場という背景を考えたとき、映画は外国語学習のための教材として優れたものの一つであると言えるだろう。

一方で、学生の感想からは、本実践で扱った設問に対して、難しいと感じていた様子も見受けられた。例えば、「一つの単語から様々な訳が考えられるのが日本語のおもしろさであり、難しさだと思った。」や「前後の文脈、状況も聞き取ったり、理解できないと全体としてどういった内容なのか把握が難しいと感じた。」などである。文脈に合った自然な表現を作成することをおもしろいと感じながらも、適切な表現を練ることが困難だと考えていたり、全体の話の流れを把握することが難しいと感じていたりしたことがうかがえる。このような課題は、どのような教材を使用したとしても存在し得る上、個人差も関係するため、授業の中で学習者全員が完全に解決できるような状況をつくることは容易ではない。しかし、今回確認できた、ことばに対する学習者の興味を拾うことで、学習者が難しさを乗り越え、学びにつなげられる授業を提供できるのではないだろうか。本研究で示した学習者のことばへの気づきと映画の教材としての優れた点を結びつける活動設定や解説の工夫が今後も必要である。

6. おわりに

本論文では「ことばへの気づき」を促すことを目標に、映画を用いた実践について分析を行った。第1章で示したように、現在の大学英語教育ではコミュニケーション能力と同時に、メタ言語能力も重視されている。しかし、研究は前者に該当するものがほとんどであり、後者について十分な事例分析がなされているとは言いがたい。このような状況の中で、「ことばへの気づき」を促すことを目標とした授業事例を提示し、かつその中で得られた学習者の反応を分析できた

ことは、本論文の意義であると考えられる。

今後の課題は二つある。一つは「ことばへの気づき」を促すことを目標に映画を用いる際、活動のバリエーションを増やすことである。今回の実践では、「理解」の側面に焦点を当てた活動は「日本語訳」であり、「表現」の側面に焦点を当てた活動は「補充英作文」であった。さらに、映画の特徴である映像と音声を活かすことを促すために、両者につづく活動として、記述の手がかりを記す活動を設定したが、これ以外にも多様な活動を行うことができるのが望ましい。例えば、映画中のやりとりについて、ディクテーションを実施し、聴き取った単語の意味やその単語が使用された理由について考えることは、「ことばへの気づき」を促す一活動となりうる。

もう一つは「ことばへの気づき」を促すことを目標に他のジャンルを用いて授業を行い、そこで得られた反応を、映画を用いた場合の反応と比較することである。これによって、各ジャンルの特性を活かした活動を設定することが可能になる。第1章で述べたように、大学英語教育で「ことばへの気づき」を促すことを目標とした実践は、事例自体が少ない。映画以外を用いた近年の実践では、柘木・久世(2014)の示した絵本の実践など、数が限られている。本講座では3.2で掲げたように、小説、洋楽、スピーチ、ミュージカルなど、他のジャンルを教材とした場合も「ことばへの気づき」を促すことを意図している。このような映画以外のジャンルを用いた授業について記述し、学習者の反応を分析した上で、映画を用いた場合と比較することは、今後の課題の一つとなる。

以上の課題を念頭に置きながら、今後も英語映画を教材とした実践について研究を進めていきたい。

付記

本論文は第1, 2, 3, 6章を柘木が、第4, 5章をシオルティが執筆している。

注

- 1) この定義には多少の揺れが存在し、これまでに提示されてきた他の定義を示すと、「言語を客体化し、言語に省察を加える能力、メタ言語を操る能力」(岡田1998: 158)、「言語を意識化する能力」(大津2004: 67)、「言語を客体として意識・観察・運用する力」(生越2006: 61)、「言語を客体化された対象として捉え、その構造と機能についての知識を利用しながら、言語の運用を行う力」(大津2010: 8)、「言語を自覚的に運用する力」「ことばについて意識化し

て考える力」(菅井2015: 56), 「特定の言語, さらには他の言語をも対象化して分析・理解する能力」(斎藤2016: 50) などとなっている。表現に多少の違いはあるが, 言語を意識化して客体として捉える能力であるという点で共通する。

参考資料

- 秋田喜代美 (2015) 「言語力としてのメタ文法能力の育成」東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編) 『カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて』東京大学出版会, pp.53-64
- 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学 (編) (2005) 『教育研究のメソドロジ—学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会
- 秋田喜代美・藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・榎木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子 (2013) 「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, pp.337-366
- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき・大井和彦 (2015) 「メタ文法能力育成をめざしたカリキュラム開発—実践と教材開発を通じたメタ文法カリキュラムの展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第54巻, pp.355-388
- アレグスティ, A. (監督), オーバーン, D. (脚本) (2006) 『イルマレ』[DVD], ワーナー・ホーム・ビデオ
- 石井明子 (2018a) 『『雪国』と『Snow Country』を用いた授業実践—国語教育と英語教育の連携を意識して』『早稲田大学国語教育研究』第38集, pp.61-71
- 石井明子 (2018b) 「英語科との連携による『深い学び』実現に向けた学習過程—俳句とHAIKUを用いた授業実践を踏まえて」『月刊国語教育研究』第553号, pp.22-27
- 大津由紀雄 (1989) 「メタ言語能力の発達と言語教育—言語心理学からみたことばの教育」『言語』第18巻第10号, pp.26-34
- 大津由紀雄 (2004) 「公立小学校での英語教育—必要性なし, 益なし, 害あり, よって廃すべし」大津由紀雄 (編著) 『小学校での英語教育は必要か』慶應義塾大学出版会, pp.45-80
- 大津由紀雄 (2009) 「国語教育と英語教育—言語教育の実現に向けて」森山卓郎 (編著) 『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会, pp.11-29
- 大津由紀雄 (2010) 「言語教育の構想」田尻英三・大津由紀雄 (編) 『言語政策を問う!』ひつじ書房, pp.1-31
- 岡田伸夫 (1998) 「言語理論と言語教育」大津由紀雄他『岩波講座言語の科学 第11巻 言語科学と関連領域』岩波書店, pp.130-178
- 岡田伸夫 (2010) 「大学英語教育と初等・中等教育との連携」大学英语教育学会 (監修), 森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一 (編) 『英語教育学大系 第1巻 大学英语教育学 その方向性と諸分野』大修館書店, pp.12-20
- 生越秀子 (2006) 「初等言語教育におけるメタ言語能力開発についての一考察—国語教育と英語教育の連携を期して」『青山国際コミュニケーション研究』第10号, pp.61-91
- 生越秀子 (2008) 「言語感覚・メタ言語能力育成の指導」尾木和英・町田守弘 (監修・編) 『国語科指導開発事典—月刊国語教育 2008・5 別冊』東京法令出版, pp.144-145
- 川崎沙織・榎木貴之 (2016) 「映画を用いた大学英語授業—語用論的力の育成をめざして」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, pp.395-406
- 斎藤兆史 (2016) 「訳読のすすめ—日本語の生態系を守るために」『日本語学』第35巻第1号, pp.41-51
- シオルティ沙織・榎木貴之 (2017) 「映画を用いた大学英語授業—語用論的力の育成をめざした事例の検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻, pp.421-436
- シオルティ沙織・榎木貴之 (2018) 「英語教材としての映画の可能性—大学英語授業を例に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第57巻, pp.313-325
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2009) 『英語教育用語辞典 改訂版』大修館書店
- 菅井三実 (2012) 『英語を通して学ぶ日本語のツボ』開拓社
- 菅井三実 (2015) 『人はことばをどう学ぶか—国語教師のための言語科学入門』くろしお出版
- 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/12/27/1380731_00.pdf (2017.1.4参照)
- 那須充英 (2016) 「ことばへの気づきを育てる『百人一首』の指導—英訳百人一首との比較を通じて」『横浜国大外国語研究』第34号, pp.48-59
- 那須充英 (2017) 「言語を意識化する能力を育てる古典指導—英訳『古事記』を教材とした授業より」『教育デザイン研究』第8号, pp.88-97
- 榎木貴之・久世恭子 (2014) 「英語絵本を用いた言語横断的授業—ことばへの気づきと解釈する力を育むために」『言語情報科学』第12号, pp.109-125
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領』文部科学省
- 文部科学省 (2010a) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版
- 文部科学省 (2010b) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 文部科学省 (2018a) 「高等学校学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/03/29/1384661_6_1.pdf (2018.3.31参照)
- 文部科学省 (2018b) 「高等学校学習指導要領解説 国語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/07/13/1407073_02.pdf (2018.7.25参照)
- 文部科学省 (2018c) 「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/07/13/1407073_09.pdf (2018.7.25参照)
- Austin, J.L. (1962). *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press. (坂本百大 (訳) (1978) 『言語と行為』大修館書店)
- Grice, P. (1975). Logic and conversation. In Cole, P & Morgan, J (Eds.). *Syntax and Semantics 3: Speech acts*. (pp.41-58). New York: Academic Press. Reprinted in Grice, P. (1989). *Studies in the way*

of words. Cambridge, Mass: Harvard University Press: 22-40.
 Hakes, D.T. (1980). *The development of metalinguistic abilities in children*. Berlin: Springer-Verlag.
 Hawkins, E. (1987). *Awareness of language: An introduction*. Revised edition. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
 Tunmer, W.E. & Bowey, J.A. (1984). Metalinguistic awareness and reading acquisition. In Tunmer, W.E. & Ptatt, C. & Herriman, M.L. (Eds.). *Metalinguistic awareness in children*. (pp.144-168). Berlin Heidelberg/New York/Tokyo: Springer-Verlag.

(指導教員 斎藤兆史教授)

資料1 解答用紙の例 (第1日に配布)

2018.6.8

映画『イルマール』(The Lake House) 解答用紙 1

【自分の解答の記入欄】

1 (1) _____
 (2) _____
 (3) _____

2 () () ()

3 (1) _____
 (2) _____
 (3) _____

4 _____

【模範解答の記入欄】

1 (1) _____
 (2) _____

2 () () ()

3 (1) _____
 (2) _____
 (3) _____

4 _____

今日の授業を振り返り、わかったことや考えたことを書こう！

メモ欄 (絵やつづきも可)

会場名: _____ 学履番号: _____ 名前: _____

資料2 アンケート用紙 (第4日に配布)

2018.6.29

映画『イルマール』(The Lake House) 解答用紙 4

【自分の解答の記入欄】

1 () () ()

3 (1) _____
 (2) _____
 (3) _____

【解答例の記入欄】

1 () () ()

3 (1) _____
 (2) _____

今日の授業を振り返り、わかったことや考えたことを書こう！

全4回の授業を通じ、訳や英辞を行ったり、映画の何処のように役立ったと思いますか？

全4回の授業を通じ、自分と解答と英辞音声・英語字幕や日本語音声・日本語字幕を比較することで、どのようなことを学びましたか？

メモ欄

会場名: _____ 学履番号: _____ 名前: _____